

第四部 サンプルメイキング

第1章 サンプルメイキングの目的

第2章 先上げサンプル

第1章 サンプルメイキングの目的

サンプルメイキングの目的

一つの商品が企画されてから、市場へ供給されるまでに、企画・技術・生産・営業の、各分野において、様々な検討、あるいは確認を行います。それらを進めるために、サンプルを中心として検討される場面が多々あります。

1 四種の目的

シルエット、及びデザインディテールのバランスの確認

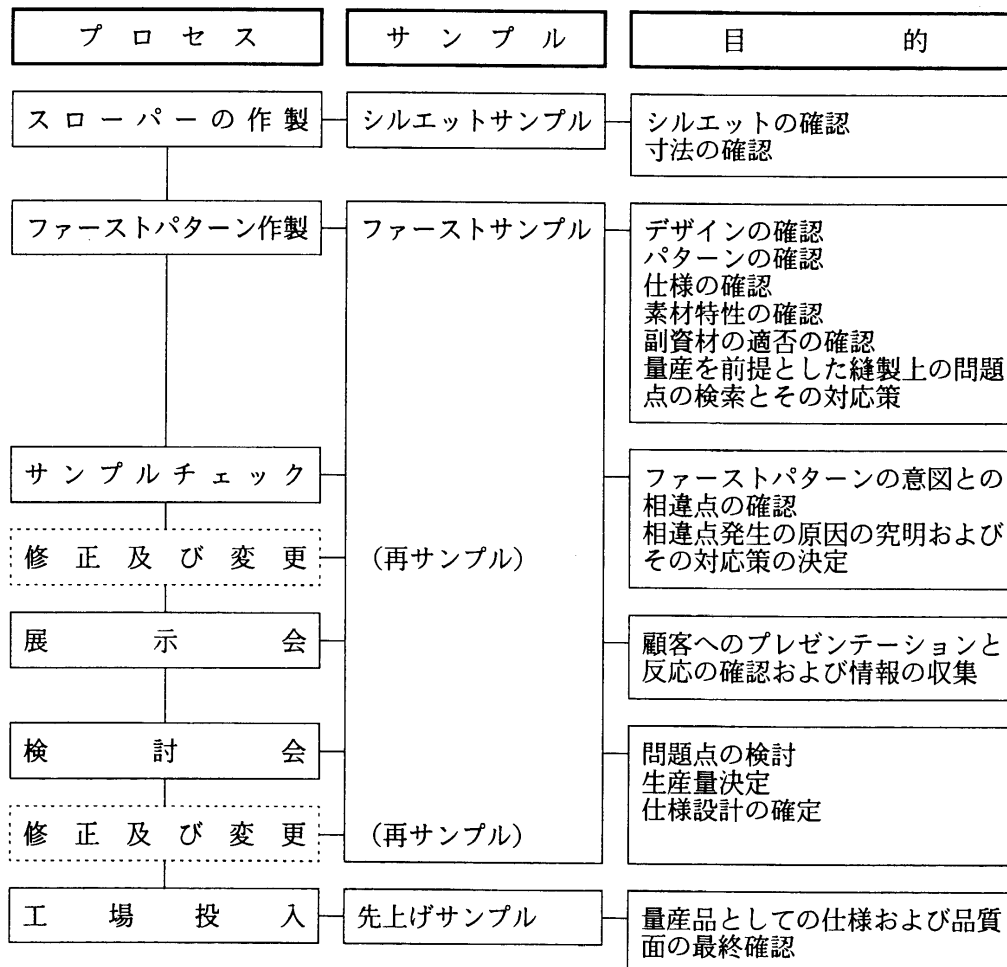
技術面についての事前検討

量産品としての品質の最終確認

営業用の見本

と、大まかには、以上が考えられますが、サンプルを効果的に活用するためには、サンプルの果たす役割に合わせて、サンプルメイキングが為されなければなりません。そこでサンプルが中心となる商品化のプロセスを追いながら、サンプルを分類して、サンプルメイキングの目的との、対比を試みることにします。

2 商品化のプロセスとサンプルメイキング



シルエットサンプル

シルエットサンプルは、シルエットスローパーのパターンの確定にあたって作製されます。本章ではシルエットサンプルの重要性と、その在り方を考えます。

1 シルエットサンプルの条件

スローパーの章で学んだように、シルエットスローパーは果たす役割の重要性やその影響力の大きさを考えると、高い技術レベルにより、しかも十分な検討を重ねながら、作製されなければなりません。従って、シルエットスローパーのパターンの確定にあたっては、必ず、サンプルメイキングによる確認が必要になります。

こうしてアイテム毎に作られたシルエットスローパーの確認サンプルを、シルエットサンプルと呼びます。シルエットサンプルは、そのパターンで対応させる素材を使用して作ることと、特別なテクニックを使わずごく一般的な量産を前提とした作り方であることが重要です。

2 シルエットサンプルの活用

シルエットサンプルは、単にシルエットスローパーのパターン確定のためだけに作製する、というのではなく、シルエットサンプルを用意しておくことによって、その後のデザイン展開の際に、スローパーのシルエットの確認が視覚的で分かりやすいことが一つと、もう一つは、縫製工場などと技術面においてシルエット上のトラブルが発生した場合、相手に対して納得させるだけの十分な力となってくれるという利点があります。同一のパターンを使用しても、縫製技術のレベルによってそのでき上がりの姿も様々で、時にはシルエットまで違ってしまうこともあります。そこで、標準的な方法で縫われたサンプルが説得力を持つことになるのです。言い換えれば、シルエットサンプルの縫製は標準的な方法で行われなければなりません。

ファーストサンプル

バイヤーへのプレゼンテーション用として、あるいは、仕様設計の確認見本としてのファーストサンプルについて、その重要性と効果的なサンプルメイキングの在り方を考えます。

1 ファーストサンプル作製の目的とサンプルの在り方

プレゼンテーション用として見せることを目的とした「サンプル」は、視覚的に美しく仕立てられていることだけで良いと考えがちですが、店頭へ出す商品としての品質を維持するためには、素材・デザイン・パターン・仕様・縫製技術・着用感等あらゆる角度から検討され、量産を前提として完成された設計が求められます。

こうしたことから、プレゼンテーション用のサンプルメイキングの際には、必然的に仕様設計の確認も併せて行われることとなりますので、実際には一点のサンプルで二つの目的に対応させることとなります。

仕様設計の検討に際しては、過去のデータや体験、あるいは学習で得た知識を基に考察を進めますが、一つの方法に絞りきれないとか、予測に確信が持てない場合の有効な手立てとしては、先ず部分縫いによる試作確認があります。目的に応じて、無駄のないサンプルメイキングの方法を考えることが大切です。

サンプルメイキング段階での検討を、充分に行っておくことにより、サンプル作製後の変更や、修正を極力減少させることが出来ますので、製品の品質のレベルアップに対しても、大きく貢献するところとなります。

2 ファーストサンプルの加工出し

完成したファーストパターンに、デザインの解説を含む縫製仕様書・表地・裏地・およびその他の付属を揃えて工場へサンプルメイキングの依頼をする作業を、ファーストサンプルの加工出し（又は職出し）といいます。

展示会等のスケジュールにあわせて、限られた期間内により完成度の高いサンプルを上げるためには、デザイナー・パターンメーカー・生産管理者の三者が協力して事前のスケジュールリングをしっかりと行うことが大切です。

スケジュールリングの順序としては、企画書に基づいて組むべきですが、現実問題としては、サンプル反の納期に合わせて組み立てをしておく方が予定の変更を余儀無くされることもなく、スムーズなサンプルアップが期待できます。

(1) スケジュールリングにあたっての確認事項

表素材（サンプル反）の納期

デザイン画の準備の状況

パターンおよび縫製仕様書の作成スケジュール

仕様書に基づく副資材の準備

サンプル投入工場の手配とサンプル製品の納期

(2) 加工出しにあたっての確認事項

パターンの各ピースが完全に揃っているか

縫製仕様書の記入漏れ、記入ミスは無いか

必要な材料はボタン等も含めてすべて揃っているか

ファーストサンプルの理想的な在り方から考えると、サンプル製品の加工は量産品が投入される予定の量産ラインで製作されなければなりません。しかし、サンプルメイキングされるものがすべて量産に繋がるとは限らないことや、サンプル納期と量産工場のキャパシティの問題等のために、量産工場のサンプル縫製部門・サンプル専門工場・縫製熟練者による個人営業のサンプル屋・アパレル企業内のサンプル縫製担当者等々によって縫製されることが多くなります。サンプルメイキングのシステムを少しでも理想に近づけるために、所謂、定番商品と言われるデザインのものや、明らかに量産化が予定されているものについては投入予定の工場にサンプルメイキングを依頼すべきです。場合によっては、量産の時の事前確認サンプルである「先上げサンプル」として扱うこともできますので、縫製工場側でも積極的に取り組んでくれるはずです。

いずれの場合でも、品質・納期ともに安定したサンプルの供給に繋げるためには、サンプル工場のシステムや規模の大小にかかわらず、企画・設計段階の遅れをサンプル工場に押し付けることのないよう、予

定通りに職出しを進行させて初めて可能になることです。

もう一つ、サンプル縫製の情報がパターンや仕様書にフィードバックされ量産品の投入の際に活用できるよう、サンプル縫製の現場の意見を聞くことを常に心掛けることが大切です。コミュニケーションを良くして信頼関係ができてくると、次のサンプルメーカーにあたっては大きな力を借りることができるようになります。

3 ファーストサンプルのチェック

サンプル製品が上がった時点で、デザイナー・パターンメーカー・生産技術及び生産管理者といった商品化に携わるセクションの関係者が、それぞれの立場上の観点から第一回目のチェックを行います。この場合は、どちらかと言えばプレゼンテーションを意識したチェックになりますが、量産を前提とした上でなければならないことは言うまでもありません。

展示会終了後、バイヤーの意見や受注の状況を参考にしながら再度ファーストサンプルの入念なチェックをし、アパレルメーカーとしての仕様設計の最終確認と品番毎の生産数量の決定をします。

なお、この時点では、生産関係のスケジュールの都合で既に一部量産を開始している場合もありますが、そのような場合には事前に必要なチェックを行い、必要な修正を済ませておきます。

(1) ファーストサンプルチェックの方法

人台に着せてみる

サンプル製品を、客観的に検討するために、人台に着せてみることから始めるが、使用する人台は必ずチェックしようとするサンプル製品のブランドの体型、及び、サイズの合ったものでなければならない。

人に着せてみる

着用感や機能性等、人の感覚や、動きによる確認の必要な部分については、ブランドのターゲットとサイズに合ったモデルによる確認が必要。

ハンガーに掛けてみる

製品として上がった場合の納品の状態や店頭での状態を想定したり、ハンガーの形状適否についての確認をする。

(2) ファーストサンプルのチェックのポイント

イメージの確認

ブランドコンセプトにあったイメージで上がっているかどうか。

素材特性の確認

設計の意図に対する表現力。物性上の特質とデザインおよび、パターンとの適合性。

デザインの確認

素材特性との適合性。シルエットおよび、デザインバランスの良否。

パターンの確認

素材特性との適合性。パターンのバランスおよび、ゆとり量の適否。

仕上がり寸法の確認

設定寸法との誤差。

仕様の確認

設計の意図に対する表現力。量産にあたっての問題点の有無。

副資材の確認

設計の意図との適合性。

縫製上の問題点の検索とその対応策

デザインイメージとの適合性。縫製加工上の難易度。

着用感

運動量を含むゆとり量の適否。着脱の際の不都合の有無。表素材及び、副資材に対する着用感。

チェックにあたっては、縫製基準書及び縫製仕様書に準じて行います。

トワルによって製作されたパターンを基に実素材で製品化した場合、その素材特性の予測できない動きや変化によって、デザインイメージと異なるシルエットで上がってしまうことがありますので、そのシルエットの違いの原因を明らかにした上で、必要に応じた修正をしなければなりません。デザインディテールについても、本来なら完成されていなければならないことですが、素材の持つ雰囲気や縫製技術上などの影響で、時には変更せざるを得ないケースも発生します。

設定寸法との誤差が生じた場合、その原因が素材の変化によるものであるのか、縫製不良によるものであるのか、あるいはパターンに起因するものであるかを確認の上対処します。特に注意しなければならないこととして、サンプル縫製の担当者が展示見本として視覚的に美しく仕立てあげること重点をおいて縫製した場合、縫製上の難点はもとよりパターン上の問題までカバーしていることがあるからです。このことから縫製担当者とのコミュニケーションの重要性を再認識しなければなりません

4 ファーストサンプルの修正

サンプルチェックによって明らかになった不良箇所に対する修正を行い、量産品の品質の向上に繋げる配慮をします。そのためには、その原因となる事柄を正しく認識しなければなりません。

特に、一つの不良現象に対してその要因となるものが単純に一つでなく複数で構成されている場合の判断は非常に難しくなりますので、先輩に相談をしたりサンプル縫製者にも意見を求める等、なるべく多くの判断材料を集めた上で不良の原因を突き止め修正の方法を決めなければなりません。

また、修正の方法を決めるにあたっては、一つの不良発生の要因に対して複数の修正方法が考えられるケース（例えば、標準的な技術力では縫製の難しい特性を持った素材であっても、技術水準の高さでそれをクリアできる場合もあれば、パターン形状の修正によって、直ることもあるというようなこと）も、数多くありますので、更に、的確な判断と処理ができるだけの、キャリアと知識が求められる仕事です。判断を過って修正をした場合には、何の効果も出ないだけでなく、むしろ逆効果となってしまうような危険性のあることを十分に懸念しなければなりません。

修正および変更の内容や度合によっては、再サンプルの作製が必要となります。

(1) 不良の現象と原因の要素

シルエットが設計の意図通りに出ていない

素材とデザインとの不適合。素材とパターンとの不適合。素材特性に起因する縫い目の伸び・縮み。縫製技術に起因する縫い目の伸び・縮み。素材とギャザー分量・タック分量・ドレープ分量等の不適正。裏地の選択ミス。デザインと裏地の仕様との不適合。裏地のパターン不良。芯地の選択ミス。芯地の仕様ミス。

デザインディテールのバランスが悪い

設計ミス。

寸法の誤差に許容範囲を越えるものがある

設計ミス。加工による素材の変化。縫製不良。

縫製がすっきり上がっていない

工場の縫製技術力不足。素材とパターンの不適合。素材に対して、イセ込みや伸ばし分量等に無理がある。素材と仕様の不適合。素材の縫製難易度とデザインの不適合。プレス不良。

着用感が悪い

設定寸法の不適合。素材の不適合。仕様の不適合。

設計ミス（開き寸法、袖山の高さとのバランス、丈と蹴廻しのバランス等）

上記のように製品の不良を起こす要素として、素材の選択から設計、縫製、仕上げに至るすべての技術が複雑に絡み合ってきますので、修正の判断は難しいものとなります。修正に伴う大きな無駄を省くためにも、製作技術のプロセスの一つ一つの完成度を高めることの大切さをあらためて認識しなければなりません。

第2章 先上げサンプル

量産品の裁断前に「先上げサンプル」と呼ばれる先行見本が作られます。これは工場での生産状態の事前確認を行うための重要なプロセスです。

先上げサンプル作製の意義

先上げサンプルは、品番毎に量産工場における製品の上がりの状態を、発注者であるアパレルメーカーと受注者である縫製工場との双方で事前に確認し合うために作られるもので、この作業は量産に入ってからトラブルの発生を未然に防ぎ、品質、納期ともに問題の無い商品を製作するための前段階として必要不可欠なプロセスです。

なお、工場での生産状態における確認見本である先上げサンプルは、厳密には量産を踏まえた完全仕上げの状態でなければ無意味なことになりますので、ボタンなどの小付属も量産に先行して準備をしなければなりません。場合によっては、サンプル分だけ先に用意をする等の特別の配慮が必要になります。

1 先上げサンプルの目的

(1) アパレルメーカーとしては

ブランドイメージに添った製品としてすっきりあがっているかどうか
量産における原材料の風合・色・柄などの上がり状態の再確認
デザイン及びシルエットがきちんと表現できているかどうかの確認
縫製仕様の確認

アパレルとして求める一定の品質レベルに達しているかどうか

(2) 縫製工場としては

アパレルメーカーのニーズに答えた製品になっているかどうかの確認
工程分析と工程編成の検討
縫製機器類のレイアウトの検討
工賃バランスを考慮した生産性の検討

先上げサンプルのチェック

先上げサンプルのチェックもファーストサンプルと同様に、縫製仕様書に則って行います。やはり、人台に着せたり、モデルに着せたり、ハンガーに掛けて同様にチェックをします。

確認項目については、先上げサンプルの目的で述べているようにアパレルメーカーと縫製工場とでは、それぞれの役割上少し違いがありますが、いずれの立場であっても、より良い品質の製品をタイミング良く上げるという共通の目的で確認を取り合います。

原則としては、アパレルサイドの都合でこの段階での仕様設計の変更を行うべきではありませんが、縫

製工場において製品の試作を行うことにより、仕様上の改善提案や縫製機器類、あるいは生産性重視の観点からの変更の要望等が明らかになりますので、その場合には、イメージや外観への影響の度合や品質の基準との妥協点を何処へ持ってくるか、個々の工場の状況も考えた上で柔軟な対応が必要です。

ファーストサンプルのチェックおよび、修正にあたっての判断の難しさを前章で認識しましたが、個々の縫製工場の背景まで考えて判断をしなければならない先上げサンプルのチェックについては、更に多岐にわたる知識をもって、あたかなければなりません。会社の規模や組織によって違いますが、専門の知識を持った技術者が先上げサンプルチェックの責任者として配置されていることから、この仕事の重要性を推察することができます。

サンプルチェックの結果の報告と工場からの提案や、要望に対するアパレルメーカーとしての見解などは「先上げサンプル報告書」などにまとめて記述し、速やかに送り返します。

サンプルチェックの途中では縫製工場との間で電話やファクシミリによるやり取りが行われることがよくありますがつまりすぎます、結果については必ず書面によって連絡を取り、記録として残して置くことが大事です。

縫製仕様書の記入にあたって同じことが言えますが、意志を伝えたい相手に正確に理解してもらうためには、要点を的確にしかも簡潔に伝えるように書き方の工夫も心がけて下さい。

先上げサンプルのチェックリスト

1 チェックリストの必要性と活用方法

これまで学んできたように、製品の上がりに影響して、重要な役割を担うサンプルチェックを限られた時間内に効率良く行うためには、チェックリストを作成しておくといいでしょう。

チェック漏れによるトラブル防止の他に、個人差によるチェックのばらつきも一定のレベルに近づけることができます。また、技術管理面においても欠かすことのできないものです。

2 チェックリスト

(1) シルエットに関するチェックリスト

前 身 頃	前線の拝み・逃げ・反り たすきじわ	ダーツ先のえくぼ 芯据え	ポケット位置・縫い
後 る 身 頃	裾の八ネ 肩パットの適否	センターベンツの開き・拝み	肩だれ つきじわ
衿	衿の形 地吟および見返しの控え	衿のすわり（返り線が甘い・辛い） ラベルの返り止めの甘い・辛い	上衿の展開量
袖	袖の振り（進み・逃げ） 袖口（折り返しのつれ・裏の控え）	袖のねじれ	袖山イセ 袖下付けの伸び
脇からの観察	前後身頃のバランス 脇線のおさまり	前身の浮き	後ろ身の八ネ 脇のだきじわ

(2) 縫製に関するチェックリスト

ステッチ	ステッチ曲がり ステッチ糸切れ	ステッチ巾 糸始末	ステッチ系の適否 糸調子	縫い目とび	運針数 糸継ぎの有無
地縫い	縫い目曲がり 縫い目の糸調子 地縫い糸と針の適否	縫い縮み 地縫い糸切れ	縫い目飛び	縫い始め・縫い終わりの糸始末	運針数
縫い合わせの状態	縫い目笑い 縫い目スリップ	縫い外れ 縫い代つれ	縫いずれ 縫い代のごろつき	地糸切れ	縫い目のパンク シームパッカリング
すくい縫い	表へのひびき	縫いはずれ	目飛び	ほつれ	
中とじ	とじ位置	とじ忘れ	つりあい		
裏地付け	裏地のつれ・ふき出し				
ファスナー付け	付け方	縫いずれ	パッカリング・伸び		
パイピング	上がり巾	ねじれ	つれ	巻はずれ	
肩パット付け	付け位置	付け方			

(3) プレスに関するチェックリスト

プレス	アタリ・テカリ プリーツのセットの適否	収縮	変色	プレスじわ	縫い代の割り
接着プレス	接着剤のしみだし・写り 芯のアタリ	風合の硬化	部分剥離	接着強度	

(4) まとめに関するチェックリスト

ボタン・ホック付け	ボタンの付け方(足の長さ・根巻き回数・糸通し回数)			ボタン付け位置
	ボタン付け糸の適否			
手まつり	まつり忘れ	表へのひびき	運針数	
しつけ留め	しつけ忘れ	しつけの方法の適否	つれ・たるみ	

(5) 素材に関するチェックリスト

表素材	裏表・毛並み方向の確認 ピリング	色違い スナッキング	織りきず しみ・汚れ	柄合わせ 地糸引け	ラン 針跡の有無
裏素材	しみ・汚れ				
芯地	モアレ 接着強度	あたり	接着剤のにじみ出し・逆しみ	部分剥離	
伸び止めテープ	表へのあたり	剥離			

先上げサンプルチェックの実際

ここで実際にサンプルチェックをしてみましょう。

1 先上げサンプルが手元に届きました。

(1) ビニールカバーをはずしてハンガーにかけられた状態を必ず見ましょう。

雰囲気はとれているか。

スッキリ上がっているか。

お客が手にとって見たくなる顔をしているか。

人台に着せる前に、ウエスト寸法、ヒップ寸法、裾幅、袖口幅などを平台に置いて採寸しておくこと。

2 人台に着せて

(1) さあ、人台に着せます。もちろんトワルを組んだ時と同型の人台です。

ジャケット、コートなど上物は肩にブラウス用肩パットを差し込んでください。

組み上げたトワルのシルエット通りに上がっているか。

左右対称にできているか。

(2) 正面、両脇、後ろからシルエットを見てください。

肩や腰のはまり、襟や袖のおさまり、柄出し、ポケットやホルの切り方、袖口、裾のまとめ、プレス、あたりなどシルエットやフェースを崩している箇所はないか。

デザインや素材を生かした縫製になっているか。

二度目の採寸で肩幅、着丈、袖丈、スカート丈、前後、脇、襟ぐり、股ぐり寸法等バランスよく寸法がとれているか。

(3) 次に芯仕様、伸び止めなどの確認。ボタン付け、まとめ等のチェック。そして裏を見てください。

裏身頃に指定通りのキセが入っているか。

袖裏のかぶり、中綴じはOKか。表につれを出していないか。

以上、目を通す箇所はかなりの数になります。それでは、アイテム別に具体的なチェックをしていきます。

3 タイトスカート（後ろ中心ベンツ、ファスナー開き）

(1) 両脇、後ろ中心が垂直に降りていますか。

一方方向に廻っている場合は、往々にして生地のココ地の目に斜行が生じています。3%の斜行率は縦にすると6%になります。工場に原反の様子を問い合わせてください。工場に許容範囲を提示してください。

(2) ベンツ、上前が脇に逃げます。

ベンツ端がプレスによる伸び、ベンツの重ねずれ、折り方、ヘムの上げ方に注意してください。

(3) ベンツの上前がそり返り、下前が巻きます。

生地にカーリングが起きています。原反スワッチをチェックしてください。顕著に現れていなければスチームアイロンで押さえてください。対策としては、右高ベンツ始末を左高に変更するか、見返しに芯を

抱かせ、ある程度の許容範囲を提示してください。

(4) ファスナー止まりにVの字のツレがでます。

ファスナー付けの際、表地を伸ばしています。

(5) ベルトが張りつきます。

ダーツ縫いが深くないですか。身体は曲線で構成されています。身体の丸みに合わせたダーツ縫いであって欲しいものです。

(6) ダーツがえぐれます。

ダーツ縫いが深く、中間プレスで伸ばしいていませんか。ヨコ地の目を追ってください。

(7) ダーツにきせがかかる。

ダーツ縫いが浅く、ダーツ奥を吊り上げてベルトに接いでいませんか。

(8) 表と裏の脇線、ダーツ線は合致していますか。指定のきせが入っていますか。

裏地にファスナーを付ける際、控え方は正確ですか。

(9) ベルト下のいせ配分は正確ですか。

ぴりつきや棚じわは出ていませんか。

(10) ウエストベルトに波打ちは出ていませんか。前カン、スナップ付けは正確にきれいに出来ていますか。

4 テーラードジャケット（腰に両玉縁ポケット）

(1) 衿のすわりは安定していますか。返り線はつながり良くできていますか。衿腰がのぞいたり、後ろ返り線に角が出ていませんか。衿の刻みはきちんとしていますか。

返り線が甘い時は、返り線の伸びや上衿の外回りが大きく上がったたり、伸びたりしていませんか。返り線が辛い時は、後ろ衿ぐり寸法が伸びたり、衿外回りが小さく上がったたりしていませんか。

返り線のつながりは上衿とラペルの接ぎが不正確ということです。

後ろ衿返り線に角ができる場合は、表衿付けの伸ばしが不足しています。表衿の返り分が多い時にもでてきます。

(2) 前端はきちんとおっていますか。

拝んでいれば前端のつまりか、脇の伸びです。逃げていればもちろん逆をあたってください。

胸ダーツやポケット口にとられて、前端が曲がっていませんか。

(3) 袖付けは左右同じ振りに上がっていますか。内袖接ぎが露出していませんか。内袖側のくせとりがきちんとされていない場合によくおきます。

袖口芯が威張っていませんか。素材によっては袖口芯の代わりにテープのみでも対応できます。明き見せは落ち着いていますか。内のり分をとっていますか。

(4) 肩線が後ろにとられていませんか。肩パットの前後のバランスはとれていますか。肩パットの出し具合は。肩パット付けの糸調子がきついため、表につれがでていませんか。

(5) 玉縁ポケットでダーツ線や脇線をゆがめていませんか。ポケットは口を開いていませんか。両端はパターン通りに腰の丸みに合わせて曲線で切られていますか。裾からの位置は正確ですか。向う布がいさっ

て見苦しくないですか。玉縁布のあたりは気になりませんか。ポケット口のまともは千鳥ですか。それとも袋布同士のミシン縫いで綴じていますか。

(6) ウエストの絞りはとれていますか。つれが出ていませんか。くせとりがなされていますか。素材によって無理な絞りや縫い代カットは最小限の切り込みに頼りますか。

(7) 前裾、見返し端でつれが出ていませんか。

身体丸みに添っていますか。見返し端から脇にかけて補強のテープをはります。後裾は落ち着いていますか。まともは響いていませんか。